

字義的意味と推論

——関連性理論をめぐる——

國分俊宏

【要旨】 関連性理論は、われわれの言語コミュニケーションのメカニズムを説明するのに非常に有効な理論である。しかしながら、われわれは、この理論の二つの柱をなすポイント、すなわち「字義的意味」と「推論」に関して疑問を提出したい。われわれの考えでは、第一に、いかなる文脈もない固定的な字義的意味というものは存在せず、第二に、推論はほとんどの場合、言語化不可能な直観とも言うべきものであって、ほとんど言語の形式そのものと切り離すことができない。関連性理論では、言語解釈においては、コードと推論という独立した2種類のメカニズムが働いていると主張するが、われわれはコード解釈と推論モデルは独立し得ないと結論する。

【キーワード】 関連性理論、意味、推論、言語哲学、コミュニケーション

0 はじめに

人が言葉の意味を理解するというとき、そこで起こっていることの内実は、案外複雑である。複雑、というのは、もちろん相手の言っていることを理解するのにいちいち頭をひねって悩まなければならないような過程が含まれているということではなく（その意味では言葉の理解はむしろ直接的で瞬時的だ）、言葉が何かを意味しうる、ということが、よく考えるとそもそもかなり不思議な事態であり、われわれが言葉を利用してどのように他人とコミュニケーションを成立させているのかを説明することは、なかなか一筋縄ではいかないということを指している。言語コミュニケーションにおいて、われわれが相手の言うことを理解し、また自分の言いたいことを伝えるという過程には、単に「言葉の意味を理解する」というだけではすまない、かなり動的なメカニズムが含まれているのである。

本稿ではまず、言語コミュニケーションにおいて「言葉の意味」と「発話者の意図」とを区別するD. スペルベルとD. ウィルソンの関連性理論

(relevance theory)¹⁾の議論に沿う形で、発話の解釈と伝達の仕組みを概観する。その後で、スペルベルとウィルソンの議論を批判的に検討したい。さらに、言葉の「字義通りの意味」という考え方の限界を具体例によって示し、そのことをつうじて、最終的に「意味」と「意図」と「解釈」との分離不可能な融合体としての言語の生のありようを浮かび上がらせるべく努めたいと思う。

1 言葉の意味と発話の意図

(1) 「この部屋寒いね」²⁾

この(1)の文（仮に誰かが口にしたものと考えて、以下では「発話」と呼ぶこともある³⁾）の意味はどのようなものだろうか。

その部屋の気温が低く、発話者が寒いと思っているということだ、ととりあえず理解できるだろう。この「文の意味」とはそういうことだ、とふつう誰もが考えている。

しかし、現実のコミュニケーションにおいて誰かがこのように口にしたとき、その人が本当に言いたいのは、実は「そこの開いている窓を閉めて

くれ」ということかもしれないし、「暖房をつけてくれ」ということかもしれない。あるいは、さらに妄想をふくらませれば、発話者が女性だとして、「もっとそばに来て抱きしめて」という意味だということさえ、あるかもしれないのである（実際の局面においてそのように判断すべきかどうかは、各自の責任でお願いしたい）。

つまり、「この部屋寒いね」という文を、現実の発話として考えた場合、その意味するところには二つのレベルがあるということになる⁴⁾。

(2) 「部屋が寒い（と発話者が思っている）」

(3) 「暖房をつけてくれetc.」

(2)がいわゆる言葉の「字義通りの意味」であり、(3)はその「字義通りの意味」を利用して発話者が聞き手に伝えたいと思っている「発話の意図」だと言うことができるだろう。「この部屋寒いね」という発話を聞いて、(2)の意味を理解しないのは、端的に日本語を知らない人であるが、(2)の意味は正確に受け取っていても、それが(3)のような意味であることに思い至るには、その発話の意味を文脈や状況に関連づけて、適切に「解釈」する能力が必要だ、ということになる。

D. スペルベルとD. ウィルソンの提唱する「関連性理論」は、ごくおおざっぱに言って、上のような構図のもとに、発話の理解について、伝達という観点からそのメカニズムを解明しようとするものである。確かに、言語においては、同じ言葉がいくつもの意味をもちうるし、文にして書き起こせばまるっきり同じ言葉が、状況に応じてまるで違う意味になることもあるのだから、言語によるコミュニケーションがどのように可能になっているのかを理解するには、メッセージコードとしての言葉の意味という側からだけ考えてはうまくいかず、常に文脈や状況と関連付けた伝達と解釈という観点からの分析が欠かせない。そのことをさらに別の例で説明しよう。

2 関連性と推論

ある夕食の席で、食事も終わりになった頃、A

とBが会話しているものとしよう。

A：コーヒーお飲みになりますか。

B：コーヒーを飲むと眠れなくなるんです。

Bの発言は、Aの申し出を断ったものと受け取ることが可能だが、なぜそのような解釈が生まれるのだろうか。杓子定規に考えれば、Bの発言は、Aの質問に答えてはいない。「コーヒーを飲むと眠れなくなる」というのは、単なる一般事象（ないしはその当人の体質）を説明したものにはすぎない。しかし、われわれには、このBの発言がコーヒーの申し出を断ったものであることが、かなりの明瞭さでわかる（かなりの明瞭さで、というのは、もしかするとそうでない可能性も完全には否定できないからだが）。

このことを説明するために関連性理論が立脚するのは、言語による伝達は「関連性の原則に基づいて、推論 (inference) によって行われる」という考え方である⁵⁾。

関連性の原則 (principle of relevance) には、第1原則と第2原則があり、それ自体詳細な説明が必要だが、ここではそのための余裕がないので踏み込まない。ごくおおざっぱにまとめてしまえば、人間の認知は、自分に向かって発せられたある意図的な刺激を、それが起こった状況にもっともよく関連するものとしてとらえる傾向があるということであり、そして伝達においては、相手もまた同じ原則に基づいて行動している、つまり、相手の発言は必ずその状況にもっともよく関連するものとして発せられていると前提してよいと考える傾向がある、ということである。

もっと平たく言えば、質問して相手が答えた以上、その発言は自分の質問に「最適の関連性がある」、つまり質問に対する答えになっているはずだ、と無意識のうちに考える、ということだ。先ほどのAとBの会話に即して言えば、Bの発言は必ずAの発言に関連している（＝答えている）と、われわれはほとんど無意識のうちに考えている。もちろんBがまるっきり関係のないことを言っているという可能性もあるが、それではBはかなり変わった人、あるいは会話というものの機微を理

解していない人だとみなされるだろう。

さて、Bの発言がAに対する「答え」だとしたらどうなるか。ここで重要なはたらきをするのが「推論」だ、と関連性理論は主張する。

「コーヒーを飲むと眠れなくなる」という発言を「文字通りに」受け取りながら、Aは同時にBのそのときの話し方の調子や表情、まわりの状況や自分自身の常識的判断等に照らして、

〈コーヒーを飲むと眠れなくなる〉→〈もうすぐ寝る時間であり、眠れなくなるのは困る〉
→〈コーヒーは飲みたくない〉

という結論に至るだろう。矢印以下は、すべて聞き手における「推論」の過程である。

つまり、発話解釈においてもっとも大きな役割を果たしているのは、推論だということになる。これが関連性理論のおおまかな主張である。

3 発話解釈の水路付け

発話解釈が主として推論の過程であるということ、スペルベルとウィルソンはたとえば次のような例で説明している⁶⁾。

(4) Jones has bought the *Times*.

(ジョーンズはタイムズを買った)

この文の意味は、次の(5)(6)のどちらだろうか。

(5) Jones has bought a copy of the *Times*.

(ジョーンズはタイムズ紙を一部買った)

(6) Jones has bought the press enterprise which publishes the *Times*. (ジョーンズはタイムズ紙を発行している新聞社を買った)

今ここのように、何の文脈も与えられなければ、まずたいていの人が(5)だと考えただろう。もちろん、文脈と状況次第によっては、むしろ(6)の解釈の方が真っ先に頭に浮かぶということもありうる。つまり、いずれにせよ、われわれは(4)の文を見たときに、無意識裡に状況に応じた「推論」を行っているのである。

スペルベルとウィルソンは、「普通の聞き手は普通の状況ではこの2つの意味からひとつを選ぶのに何の問題もなく、たいていは選択をしたとい

うことすら気づかないだろう」とそれがほとんど無意識の過程であることを強調する。そして「この文が両義的であることを指摘され、どちらの解釈が正しいかどうかやって知るのはかと問われたら、彼らは一様に何かしら論理的に不完全な説明——だって正しいのはこの解釈だけだからとか——でもって答えるのだ」と言う。

今私は、何の文脈もなければ、まずたいていの人が(5)だと考えただろうと言ったが、例えば、どうしてそう考えるのか、と聞かれたらどう答えるだろうか。「だってもうひとつの解釈の方は普通ありそうにないから」と答えるかもしれない。しかしこれこそまさに論理的には答えになっていない不完全な論法でしかない。しかし、このように論理的には不完全にしか答えられないという点にこそ、言語による伝達と理解の鍵がある、とスペルベルとウィルソンは言う。

このような不完全な論法の背後には、話し手というものは、自分自身で、真実性とか情報性、わかりやすさ等についてある基準を定め、この基準に合う情報しか伝達しようとしたくないものだという仮定がある。話し手が一貫してこの基準を守り、聞き手が一貫してそれを期待する限り、どのような発話が与えられ、それについてどれほど言語的に可能な解釈があるろうと、それらはどれも推論上除外することができ、伝達と理解の作業はその分たやすくなる⁷⁾。

一体に、どのような推論も許されるというのなら、言語解釈の余地は際限なく大きくなり、相互理解の道はほとんど途方もなく広大なものとなる。道しるべもない平原に取り残されたように、聞き手は手がかりすらつかめず、途方にくれるしかないだろう。しかし、実際にはそのようなことは起こらない。どのような推論を行うべきか、どのような解釈をとるべきか、についての「水路付け」が、通常の言語コミュニケーションには必ず伴っているからである。それがすなわち「最適の関連性」ということにほかならない。

4 コードモデルと推論モデル

さて、このように発話解釈の実態を分析してみると、発話の理解においては、単純に「言葉の意味」という言い方で普通の人が理解しているような、コード（メッセージ規則）だけでは足りない、ということがわかるだろう。「コーヒーを飲むと眠れなくなる」という言葉を、その「文字通りの意味」だけで理解しては、この発話の「本当の意味」(=発話の意図)を理解することはできない。「コーヒーを飲むと眠れなくなる」という「文字通りの意味」を受け取りながら、同時に「推論」を行うことによって、初めて言語による他者とのコミュニケーションは可能になるのだ、というのが関連性理論の主張なのである。

ここで重要なことは、規則体系としての言語コードの側には、この「推論」を保証するような規則はまったくコード化されていないということである。つまり、「コーヒーを飲むと眠れなくなる」という文が、コーヒーの申し出を断るという意味を持つ、という規則は、少なくとも「言語体系」の中には存在しない。辞書や文法書をどうひっくり返しても、そのような意味へといたる回路は出てこないのである。このことは、メッセージコードとしての言語と推論過程とは、まったく別の二つのものだというを意味する。

コード的規則から示唆される内容と、推論から引き出される内容とが別のものであるということを示すためにスペルベルとウィルソンが挙げている例は、非常に興味深いものである。彼らは、次のような例を挙げて説明している。

(7) (a) Either Mary is early or Bob is late.

(メアリーが早いとかボブが遅刻かだ)

(b) Bob is never late.

(ボブは決して遅刻しない)

(8) [mɛəriːtɪzərˌliː]

(9) Mary is early.(メアリーは早い)

スペルベルとウィルソンの解説は概略次のようなものだ²⁸⁾。

メアリーが早いということ、すなわち(9)は、(7)

の二つの前提から推論できるし、また、(8)の音声信号から解読できる。しかし、その逆は成り立たない。つまり(9)は(7)の音声信号からコード的規則によって「解読」されるものではないし、また(8)から(9)を理解する過程は、「推論」によるものではない。(7)から(9)を導き出すのは「推論」による過程だが、一方、(8)から(9)へは信号解読的なコード的規則によって結び付けられている、というわけだ。この両者は、決して混同されてはならないのである。

なるほど、と思う。ただ、私としては、実はこの説明にこそ、言語の形式と推論とが切り離せない証左があると考えたいのだが、それは少しレベルの違う話であるし、後で詳しく論じることにして、とりあえず今はコード化過程と推論過程は別のものだという説をそのまま受け入れて話を進めることにしよう。

一般に、言語の理解と伝達においては、コードによるメッセージの暗号化と解読に比すべき過程がなされているのだと信じられている。つまり、発信者は、あるコードにしたがって組み立てたメッセージを発信し、それを受け取った側は、同じ(あるいは逆の)手順に従って信号を解読し、元のメッセージの復元を行う、というものである。よく引用される有名なシャノン&ウィーバーの図式⁹⁾がその代表だ。

しかし、言語伝達における「コードモデル」とでも呼ぶべきこの図式は、実は決して成立しない。このことはすでにスペルベルとウィルソンはもとより¹⁰⁾、大澤真幸などによっても指摘されているので¹¹⁾、詳しくは繰り返さないが、手短かにその批判の要点だけを述べておくとういうことになる。

コードモデルによる伝達が成立するためには、互いにメッセージの信号化と解読の知識を共有している必要があるが、そのような相互知識は、この世界にいる人間の誰にとっても保証されない。相手が、必ず自分が知っていることを知っている、それも自分が知っているような形で知っている、という保証はどのようにしても成り立たないからだ。モールス信号や何らかの暗号ならば、その解

読格子が必ず両者に、いわばメタ・レベルで提供され、共有されている。しかし、通常の言語伝達においては、われわれは決してそのようなメタ・レベルに立つことができないのである。だから、まさに電気通信技術に示唆を受けたシャノン&ウィーバーのモデルは、自然言語には当てはまらないのだ。

実際、コードモデルによる説明は前述のとおり相互知識の存在を前提とするが、この場合、世界についての知識が単に共有されているだけでは実効性を持たず、互いに相手はその知識を共有しているということも知っていなければならない。つまり「『知識の共有』という知識の共有」である。しかし、この「互いに相手はその知識を共有している」という知識も、単に共有されているだけでは実効性をもたず、「互いに相手はその知識を共有している」という知識もまた互いに共有していることを知っていなければならない。しかし、この知識もまたそれだけでは実効性を持たず、『互いに相手はその知識を共有している』という知識を互いに共有している」という知識もまた互いに共有していなければならない…。以下無限に続く。これは、われわれのコミュニケーションの実態ではありえないのである。

さて、こうしてコードモデルがわれわれの言語伝達を説明する上で不十分であるとしても、それでも言語という体系がある種のコード的規則であると考えたくなる誘惑は依然として大きい。何よりも、それはある種の「体系」だ（文法や統辞法、意味などの）とふつう人は考えている。そのことの是非はともかくとして、しかし必ずしも言語がコードであることまでも全面的に否定する必要はない、とスペルベルとウィルソンは言う。問題はあくまで「伝達」なのであり、伝達においては、コードモデルとは別に「推論モデル」の枠組みが存在し、かつ有効に機能するのだ、というのが彼らの主張なのだ。つまりコードモデルと推論モデルという二つの違う伝達の仕組みがあり、言語伝達にはその両方が関わっている、というのである。

われわれは少なくとも二つの異なる伝達のモ

デルがあると主張する。コード化＝コード解読モデルと推論モデルである。〔中略〕特定の伝達過程にコードの使用が関係するからといって、全過程がコードモデルで説明されるはずだということにはならない。〔中略〕言語伝達は複合的な形の伝達である。言語的コード化＝コード解読も関係するが、しかし、発話された文の言語的意味だけでは、話し手が意味しようとする内容を十分にはコード化できず、単に話し手が意味しようとしている内容を聞き手が推論するのを助けるにすぎないのである¹²⁾。

「この部屋寒いね」や「コーヒーを飲むと眠れなくなるんです」のような発話で確認したとおり、「発話された文の言語的意味」すなわち「字義通りの意味」を理解することは、必ずしもその話し手の「意図」を正しく解釈することにはならない。言語的コード化＝コード解読は、あくまで「字義通りの意味」を復元することにだけ関わるのであり、そこから先は「推論」だというわけである。そして、「推論」のレベルにはコード的規則は存在しない（介在しない）、というのがスペルベルとウィルソンの主張なのである。

5 「字義通りの意味」への疑問

さて、ここまでスペルベルとウィルソンの「関連性理論」の議論を追ってきた。もちろんこれは網羅的な説明ではなく、あくまで特定の部分にだけ焦点を当て、これから論じようとする内容に沿った形で紹介したにすぎない。

私はここで、関連性理論を全体としてひっくり返そうという意図を持ってはいない。ただその二つの点、すなわち「字義的意味」と「推論」について、別の見方を提示したいと思う（それは見方によっては根源的なものへとつながるかもしれないのだが）。あるいはそのうちの少なくとも前者の論点についてはすでにスペルベルとウィルソン自身も十分に承知しているかもしれず、その場合には、結局は彼らが言っていることのある部分に

ついて、その力点を変えながらあらためて強調するというだけのことになるかもしれないが、ともあれ、それは私にとっては非常に重要な、本質的と思われる点なのである。

その点について説明していくために、まずは言葉の「字義通りの意味」とは何か、という点にこだわりながら、いくつかの具体例に即して、言葉の了解可能性の限界を見極めることから始めることにしよう。というのは、「関連性理論」は基本的に、言葉の「字義通りの意味」(言語的コード化の部分)と「推論」による発話の意図の解釈(推論モデルの部分)という二階建てを前提として構成されているが、私はこの「字義通りの意味」の確定性に根本的な疑問を持っているからである。

もちろん、いかなる文脈からも独立した中立的な「字義通りの意味」など存在しないという主張といえ、すでにJ.R. サールの「字義的意味の相対性のテーゼ」などによって論じられている¹³⁾。しかし、サールは「マットの上にネコがいるThe cat is on the mat」のような平明な文を例にとり、そのような場合でさえ「字義通りの意味」は相対的にしか決まらなると論じたのであった。私としては、ここであくまで関連性理論を念頭に置きながら、むしろ「字義的意味」を決定すること自体が不可能になるようなあいまいな文例に焦点をしばって検討してみたい。そうすることで、関連性理論の言う「推論」の働きが明瞭に浮かび上がってくると考えるからである。

先に私は、言葉においては、文にして書き起こせばまるっきり同じ言葉が、状況に応じてまるで違う意味になることもある、というふうに出した。それは、例えば次のような文を考えればすぐにわかるだろう。

(10) すごい人だね

これは、ある一人の人物を指してその人の能力なり人格なりを評して「すごい人だ」(だが一体どのような意味で「すごい」のかは依然として不明である)と言っているととらえることもできれば、また別に、大勢の人を指して(例えば初詣の神社とかデパートのバーゲンセールなどを思い浮

かべればよい)、「ものすごくたくさんの人出だ」と言っているととらえることも可能である。このような発話において、「すごい」とはどのような意味なのか、「人」とは単数なのか複数なのか、など、ほとんど一切が不明である。「すごい」が肯定的な意味合いであることもあれば、否定的な意味合いであることもあるだろうし、率直に言っている場合もあれば、皮肉で言っている場合もあるだろう(「まったくやつはいい友達だよ」などと同様に)。さて、私がここで問いたいのはこういうことだ。この(10)の「字義通りの意味」とは何であろうか、と。

言葉に「字義通りの意味」があると考える人たちは、この文の「字義通りの意味」が言えるのでなければならぬ。しかし、あっさり先回りして答えてしまえば、私にはこの文の「字義通りの意味」を言うことは不可能であるように思われる。

もちろん、たった今、上で行ったように、いくつかの可能性を挙げることはできるだろう。しかし、いくつもの可能性があり、しかもそのどれにも決められない「字義通りの意味」とは一体何なのだろうか。しかもそのようないくつかの可能性を挙げたところで、それで現実に起こりうるこの文のすべての使用ケースをカバーできるかという点、おそらくそのようなことはない。現実の言語コミュニケーションでは、さまざまな思いもよらない「新たな意味」で、ある語や表現が使われることはいくらかでも考えられるからだ。

それを、哲学者の野矢茂樹にならって、言語の創造的な使用、ないしは「使用の創造性¹⁴⁾」と呼んでもいいだろうが、しかし、ここで大事な点はこの(10)のような文の場合、そもそもまず「字義通りの意味」自体が定められない、ということにある。一体に「使用の創造性」というからには、まず「字義通りの意味」が定まって、それとは違う変則的な形でその語を使用する、という枠組みで物事が捉えられている必要があるが、ここでは、そういう枠組み自体が適用しにくい。「字義通りの意味」が、ここでは言語の「使用」と切り離せない形で存在しているのである。

6 意味の文脈依存性

私の考えをここで結論的に言ってしまうえば、私には、言葉に固定的な「字義通りの意味」があると考えよりも、言葉の意味はそのつどごとの使用と切り離せない形でしか存在しない、と考えるほうが理にかなっているように思われる。

もちろん「すごい人だね」のような文はむしろ特殊なケースであって、実際には「字義通りの意味」がきちんと定まる語や表現のほうがはるかに多い、という反論があるかもしれない。しかし、私には、この「特殊なケース」が、実際には特殊ではなく、言語というものに対して全般的に当てはまるのではないかという、ほとんど直観的な認識がぬぐいきれない。表面的には「字義通りの意味」が定まるように見える語や表現も、実際にはそれを超えた「創造的な使用」が、日常的にもごく当たり前に（それこそわざわざ「創造的」と称するまでもないほど）、存在するのであって、そうだとすれば、「字義通りの意味」と「変則」との二層構造を考えることに、どれほどの意味があるだろうか。逆に、言葉はそのつどごとに一回的な意味を持ち、それは文脈を離れては決定しえないと考えてもなんの不都合もないのではないか。

むしろ多くの言葉において「標準的な意味」というのはある。「太陽」はやはり太陽なのであって、「月」を意味するわけではないし、「美しい」と言えば美しいという意味であり、「ガラス」と言えば、窓ガラスであったり、ガラスの食器であったりするような、そういう「ガラス」をとりあえず指すと考えるしかない。そのような形での意味がころころ変わるとしたら、やはり言葉を使ったコミュニケーションはほとんど不可能に、少なくとも非常に効率の悪いものになってしまうだろう。「太陽」の「標準的な意味」がとりあえずあると仮定したうえで、例えば「彼女は僕の太陽だ」というような表現（陳腐な隠喩だが、ここではとりあえずその陳腐さには目をつぶっていただきたい）のような「変則的」な使用があるのだと考えるのはごく自然なことだ。

しかし、ここで大事なことは、「太陽」や「ガラス」がそのような「標準的な」用法において使用されているのか、それとも「変則的な」用法において使用されているのかは、実はそのつどの発話のたびごとに、やはり一回的にしか決まらないのだということである。それは例えば、飛行機の墜落する確率が統計的には何百分の一かだとしても、自分が乗るその当の飛行機が落ちないですむかどうかは、やはり無事着陸するまではわからないというのと似ている。言語コミュニケーションにおいては、意味はやはりそのつどその場でとらえるしかないのである。統計的に墜落の確率がどんなに低くなろうと、そのことは本質的にまったく変わらない。

そもそも「標準的な意味」を定めるための、まったく中立的な文、どのような文脈からも切り離された言葉などというものはこの世に存在しない。言葉は必ず文脈を背負っている。辞書や語学教科書の中にある言葉だって、それは辞書や語学教科書の中という文脈を与えられている。結局、あらゆる言葉は中立的ではありえないのである。そのことをもう一度平たい言葉で繰り返せば、言葉の意味は徹底して文脈依存であるということになる（それはすでにJ.R.サールが明らかにした「字義の意味の相対性のテーゼ」に含まれていたことである）。

7 言葉の意味の不確定性

実はスペルベルとウィルソンも、「コード化＝解読過程」と「推論過程」の二層を語りながら、実際には、コード解読は必ず推論を伴わなければ成立しないということを強調している。「コードによる伝達過程は自律的でなく、推論過程に従属している¹⁵⁾」という彼らの言葉は、要するに「字義通りの意味」はそれだけでは（＝自律的には）存在しない、と言っているのと同じことだし、さらにその先で、「コード解読だけで生じる想定というものはなく、どの想定も復元にも推論要素が必要とされる¹⁶⁾」ともあり、やはり単純にコード

解読的な意味だけを定めるといことはできず、必ず文脈が必要だと言っているように読める。

しかしながら、やはり彼らの議論を読むと、それはあくまで「伝達と解釈」、つまりコミュニケーションの場合の話であって、言語体系としての中立的なコードは厳然と存在し、中立的なものとしての言葉の意味は必ず定まると考えているふしがある。言い換えれば、中立的で非人称的（あるいは無人称的）なコード的規則としての言語体系というものがどこかに存在することは信じて疑っていないように見えるのである。現に彼らは、先ほどの引用のすぐ前のところで、「われわれは言語伝達を、コード化とコード解読に基づくものと、意図明示行為と推論に基づくものの2種類の伝達過程を含むものとみなす¹⁷⁾」と明言している。これはとりもなおさず、コード化とコード解読に基づく言語体系が、やはり「推論過程」とは別のものとして成立しているともなしているということだ（その上で、あくまで「言語伝達」においては、このコード体系はそれだけでは不十分で、必ず「推論過程」を伴わなければならないと言っているわけだ）。

しかし私は、そのような中立的なコード体系としての言語というものの自体の存在が疑わしいと考えている。私は今、いついかなる場合においても文脈を離れた言語的意味などというものには存在しない、と主張した。これは、表面的には結局、言葉の意味は文脈依存的であるという、ごく月並みなことを言っているのと同じことになるが、しかし、文脈依存的でないニュートラルな言語体系、言語的意味なるものをまったく担保しないという一点において決定的に異なっている¹⁸⁾。

たいていの人は、言語という体系がどこかに（だが一体どこに？）存在し、言葉には「字義通りの意味」があると信じている。だがそれは、どこにも中心や基盤を持たない不安定で流動的な、浮遊するネットワークのようなものにすぎないのではないか。「言語」とは、突き詰めればそのような、根拠を持たぬ一回的なものでしかなく、それでもわれわれが通常は言語をある種の確固とし

た規則体系のようなものとして認識し、言葉の「標準的な意味」を認めて暮らしているということは、要するに、われわれを取り巻くこの世界が基本的には安定しているということの帰結にすぎないのではないか。つまり、玄関先に停めてあった自転車が、朝起きてみたらダンプカーに変わっていた、というようなことは起こらないということだ。当たり前でバカバカしいことを言っているように聞こえるかもしれないが、「言語」が安定して見えるとしたら、事実としてこの世界が安定しているという基盤の上でしか、本当は説明がつかない。そのことを人がしばしば忘れてしまうのは、まさにそれが当たり前でバカバカしいからである。

言葉が、文脈を離れては意味を確定しえず、しかもそのことに人が無自覚であることを表す例として、次のような文を考えてみよう。

(11) マジフェニックスではウルカイザーには勝ち目がない

これは、私が子供と一緒に読んでいた幼児向けのテレビ雑誌に載っていた文である。またしてもバカバカしいと思うかもしれないが、一応説明しておく、マジフェニックスとウルカイザーはどちらもかつて放送されていた「魔法戦隊マジレンジャー」（テレビ朝日系）というヒーローものの番組に登場するキャラクターである（ちなみに今は「轟轟戦隊ボウケンジャー」を経て「獣拳戦隊ゲキレンジャー」に変わっている）。

さて、この(11)の文によれば、マジフェニックスとウルカイザーはどちらが強いのであろうか。そりゃウルカイザーでしょ、と一瞬思った人もいるかもしれないが、あらためて問われると答えに詰まるだろう。そう、この文は、私のように子供と一緒に毎週日曜日の朝7時半からテレビの前に座っていた人間にとっては自明だが、そうでないたいていの大人にとっては、意味が確定できない文なのである¹⁹⁾。

だが、これを次のように変えてみればどうか。

(12) ダンプカーでは自転車には勝ち目がない

(13) 自転車ではダンプカーには勝ち目がない

どちらが強いのか、答えははっきりしている。どちらにしてもダンプカーである。つまりこのとき、この文の意味を定めているのは、言語コードではない。単なるわれわれの日常的知識、つまりは常識である。何のことはない、われわれはダンプカーがどんなものか、自転車がどんなものか、初めから知っているから、その常識をなぞっているだけである。その常識を持たない人間にとっては、言語コードは、何一つ教えてくれない。(ちなみに、マジフェニックスとウルカイザーでは、ウルカイザーの方が強いのである。どうでもいいことだが)

だとすると、一体言語とは何なのだろうか。ひとつだけ言えることは、われわれは、まったく何の「文脈」もないと思っているところでも、すでに必ず何らかの暗黙的な了解の広がるある世界の中に住んでいるということであり、その世界からは、どのようにしても抜け出すことができないということである。

8 慣習という文脈

さらに、世界についての一般的常識と同様、われわれの言語理解を助けるのに、ほとんど習慣的などと言ってもよい言語使用の慣習ということがある²⁰⁾。どういうことか。

外国で日本映画を見ると、英語などの字幕がついていることがあるが、昔、あるヤクザ映画の中で「親分にゃ、貸しはつくれねえ」というセリフにこんな英字幕がついていたことがあった。

Boss, you can't make a cake.

そもそも主語を取り違えている、などと解説するのも野暮だが、字幕翻訳者は「菓子(ケーキ)を作る」という日本語のイディオムがあるとでも思って、苦し紛れにそのまま「直訳」したつもりなのであろうか。

ともあれ、ここでわれわれ日本語話者にとって新鮮な驚きなのは、「オヤブンニャカシワツクレネエ」という音声信号が、確かにこのような英語に訳されうる文としても成立するということであ

る(実際には、「貸し」と「菓子」では微妙にアクセントが変わるはずで、それはネイティブの耳なら聞き逃すはずのないものだが)。しかし、たとえカタカナで書かれた文字情報だったとしても、ふつうの日本語能力を持つ話者ならば、まず誰一人としてこのような解釈は思いつくまい。だが、それは一体なぜだろうか。

もちろん文脈によって、つまり最適の関連性を持つか持たないかという基準によって「ケーキ」などという考えは排除されるのだ、というのはそのとおりだろう(ただしその場合、少なくとも「貸し」と「菓子」の両方の可能性が考慮されたうえで選択されるという過程が必要であろうが、実際にはこの例の場合、理解は瞬間的・直観的ではないかという疑問は残る)。しかしまた、まさに(おそらく英語字幕の翻訳者がそう考えたように)「菓子を作る」というイディオムが日本語にあったとしたらどうなのだろうか。いや実際にはないのだから仮定の話をしてもし方がないだろう、という話ではない。そのようなイディオムがあるかないか、本当はわからない。なぜなら、自分の言語知識が完全で網羅的なものであるという保証など、究極的にはどこにも、誰にもないからである(私は今「実際にはないのだから」と書いたが、単に私が無知で知らないだけかもしれない。もし知っている人がいたら教えてほしい)²¹⁾。そしてその場合には、もしかしたら「菓子を作る」という何らかの意味深いイディオムが存在し、かつそのイディオムの意味がこの場面にふさわしいものかもしれない、ということも考え合わせねばならないことになる。しかし、そうだとしたらその逡巡の過程には、少なくとも感知可能な程度の時間はかかるはずである。

にもかかわらず、われわれはこのセリフを瞬時に理解する。それはなぜだろう。私にとっては、その理由は単純である。それは単に、このような場面ではこのようなセリフが使われることが慣習として定着している、つまりは紋切り型だからである。われわれは、紋切り型は瞬時に(ほかの可能性を考慮することなく)理解するのだ。

したがってこういうことになる。われわれの言語使用には、明らかにある種の慣用的な部分があるが、そのような言語上の慣習もまた、一種の「文脈」として作用する、と。「親分にゃ、貸しはつくれねえ」のような例の場合、おそらく非日本語話者であろう字幕翻訳者が、その「文脈」を共有していなかったということだ。

これと似たような例をもうひとつ挙げよう。

吉本ばななの『キッチン』の英訳書には、たとえば「みかげと一緒にじゃない」というせりふを、「あなたにはみかげがいるじゃない?」という意の英語に訳してしまっている箇所があるという(原文は、「みかげと同じ、同類」の意)²²⁾。

この場合もまた、確かに両義的な可能性のある文面が、「ノン・ネイティブ」な翻訳者によって、「ネイティブ」ならしめないような解釈で訳されてしまっている例だといえるだろう。「みかげと一緒にじゃない」という文は、確かに両様の解釈が可能だが、通常日本語能力をもつ読み手なら、原文の『キッチン』を読むかぎり、誤解の可能性はほぼないと言ってよい。したがっておそらくそこには、日本語の使用に通曉した者だけが共有するある種の慣習的な「文脈」があるのだということをおうかがわせるのではないか。

このような例は、やはり「字義通りの意味」なるものの存在を揺るがせるだろう。「みかげと一緒にじゃない」という文の「字義通りの意味」とは何か、ということが問われるからである。もちろん、それは「ノン・ネイティブ」の翻訳者には理解できなかっただけであって、われわれ「ネイティブ」にはその字義的な意味は自明だ、という反論があるかもしれない。だが、こうした例が示すものは、実はそもそも「ネイティブ」が理解する「字義通りの意味」なるものも、それが「正しい」とする根拠はどこにあるのか、という問いなのである。マジフェニックスの文は、ネイティブであろうと揺れが起こることがわかりやすく示された例であろう。その「揺れ」が自転車とダンブカーになったとたん意識されなくなるというのは、要するに、表面的には何の曖昧性もないように見

え、両義的な解釈の余地がないように見える文においても、その理解は、実は世界についてのわれわれの了解や言語慣習上の文脈によって支えられているのだということだ。

9 意味と意図の相互浸透性

すでに述べたように、スベルベルとウィルソンもまた、言語というものは本質的に、それだけでは(つまりコードだけでは)意味を決定することができないものであるという立場に立っている。そのかぎりにおいて、私もまたそう異なる考えを表明しているわけではない。しかし、決定的に違うひとつの点は、すでに述べたことだが、彼らはあくまでコード的規則としての言語体系自体は温存したままであるという点である。私はそのような中立的で固定的な体系はないと主張する。さらに、もうひとつの点は、ここで初めて提出する論点だが、「推論」にかかわるものである。関連性理論においては、言語コードは存在するが、それだけでは意味を決定することが不可能であり、それを「推論」によって補う、と考える。本稿の初めの方で説明したように、こうしたコードモデルと推論モデルとの相補的関係が、関連性理論の眼目のひとつである。しかし、このコードモデル自体の存在の自明性を疑い、コードを推論で補うのではなく、言ってみればコードは常に文脈(彼らの言葉で言えば「推論」とともにしかない、と主張する本稿の議論の枠組みでは、この「推論」のあり方も、本質的に変わらざるを得ない。コードがあって推論がある、のではなく、コードと推論はいわば完全に癒着した状態でしか存立しないのだとすれば、彼らが考える推論モデルも、そのまま維持することは難しくなるからだ。

ここであえて短絡的な言い方をすれば、私は「推論」もまた存在しないと言うべきだと考えている。言葉の意味と文脈とが不可分であり完全に密着しているのだとすれば、その意味を決定するために動員される「推論」なるものを、果たして「推論」という言葉で呼ぶべきかどうか、怪しく

なってくるからである。だが、そこまで話を進めるのは、この段階ではまだ早計だろう。むしろここでは、意味と意図とがどのように分かちがたく結びついているのか、そしてそこに、どのように「推論」が入り込む余地があるのか、あるいはないのか、そのことをもう少し詳しく見てみることにしよう。

例えば、授業をしているとき、学生がマンガを読んでいるのを発見したとしよう。私はつかつかと近寄って行って、「これは何ですか」と言うかもしれない。このとき、この文の意味は何だろうか。「目の前にあるそのモノが何であるかを訊いている」という意味でないことは、はっきりしている。「マンガです」などと答える学生がいようものなら、よけい教師の怒りを買うだけだ。つまりそのとき、「マンガです」と答えた学生は、「これは何ですか」という質問の意味を正しく理解していないことになる（いや、本当は質問ではないのだが、そのことはとりあえず措く）。「これは何か」あるいは「～とは何か」という問いは、実は（多くの人が指摘するように）かなり厄介な問いなのである。ただここでは、「文学とは何か」といった「とは何か」式の問いの厄介さ、特殊性について話を広げたいのではなく、実はごく単純に「何ですか」という表現の多義性とその理解のことを考えたいのだ。それはこういうことである。

例えば、家に帰ってきたとき、机の上に私の予期しないケーキが置いてあったとしよう（別に願望しているわけではない）。そこで驚いた私が理由なり事情なりを知ろうとして妻に「このケーキ何？」と聞いたとき、彼女が「モンブランだよ」と答えたとしたら、彼女は私の質問の「意図」を正確に理解してはいない（「マンガです」と答えた学生と同様に）。だがそのとき、彼女は果たしてこの文の「字義の意味」も理解しているのだろうか。

「このケーキは何ですか」のような両義的な文の字義の意味を理解するとは、そのとき、その「質問の意図」を理解するということと、正確に同値ではないだろうか。ここでは、文の意味と質

問の意図を分離することはできない。これは、意味を理解することがそっくり意図を理解することであり、意図を理解することがそっくり意味を理解することであるような、そのような事態を表す端的な例であると私には思われる。

一般的に言っておそらく、多義的な表現の意味を一義的に定め理解するという作業は、その発話の意図を把握するという作業と同時的なものでなければならない。意図を把握するためには文の意味を理解しなければならないが、文の意味を理解するためにはその意図の把握が不可欠になる、そういうことが、少なくともここでもっとも明瞭な形で起こっている。そしてこのことは、発話の理解に多かれ少なかれ付いて回る、言語行為の本質的な現象ではないかと私は思う。

先ほど一度名前を出した野矢茂樹は、「まったく平凡な事実の指摘」にすぎないことわりながら、「言語行為の意図と文の意味とは相互に依存しあっている²³⁾」と書き、その事実を、仮に「意味と意図の相互浸透性²⁴⁾」と呼んでいる。われわれとしても、その主張に異論はないが、ここでは、それをもっと徹底した形で理解することを提案したい。というのも、野矢は、例えば「雨が降っている」と発話することで「窓を閉めてくれ」を意味するような例を挙げながら、字義通りの意味とその変則的使用、という「二層構造」を引き出していくからだ。つまり、野矢にあっても、「意味」と「意図」との二本立ては、基本的に維持されているのである。なるほど、「『字義どおりの意味』を利用して何ごとかを為すという二重構造が、言葉の働きには確かに見られる」のであり、「文の意味を使用という観点から解明しようとするのであっても、なお、そこに標準的使用と変則的使用の二層が区別されねばならない²⁵⁾」という野矢の主張は、「暖房をつけてくれ」という意味で「この部屋寒いね」と言ったり、「窓を閉めてくれ」という意味で「雨が降っている」と言ったりするような例を考えるかぎり、確かに説得力がある²⁶⁾。しかし、少なくとも、上に挙げた「このケーキ何？」という事例について見れば、「意味」と「意

図」は相互浸透という以上に、完全に骨がらみで結びついているように見える。少なくともこのとき、文の意味を決定するためには、同時に私の質問の意図もまたわかっているでなければならぬ。その関係は、二層構造というようなものではなくて、いわば完全に「一心同体」だとしか言えない。だから、われわれとしては、この「意味と意図の相互浸透性」を、互いに別個のものが依存しあうというイメージではなくて、それ自体決して切り離すことのできない一個の融合体として理解することを、あらためて強調しておきたい。

10 「推論」の内実

さて、その上で、ここで「推論」がどのように働いているのかを確かめてみることにしよう。むろん、「このケーキ何？」のような例では、私の発話を理解するのに、妻がそもそも「推論」しているのだろうか、という疑問があることは承知の上だ。まさにその疑問が、ここでは肝腎なのである。

あえて厳密に考えれば（というかスベルベルとウィルソンの理論では常に厳密に考えるのだが）、この場合にもやはり「推論」はある。机の上におかれたケーキを前にして、帰宅したばかりの夫が「このケーキ何？」と発話するのを聞いた妻は、同時に、そのケーキは夫にとって予期しないものであることも知っている。だとするならば、妻はその状況の全体をコンテキストとしながら「このケーキは何であるか」という発話の意図を探ることになるだろう。すると、そこで発せられているのは、モンブランだのミルフィーユだのといった類の答えを期待する質問ではなくて、いかなる由来、事情に基づいてこれがここにあるのか、つまり「これは一体なんだ」という意味の質問であるということが「推論」されることになるだろう。このとき、この「推論」に基づいて、「このケーキは何ですか」という文の「字義の意味」も定まることになる。

ところで、ここで私にとって興味深いことはふたつある。ひとつは、今軽率にも口にした「これ

は一体なんだ」という意味の質問、という言い方であるが、当然ながらこのような言い換えは適切なものではない。「これは一体なんだ」という文もまた多義的であるからだ。「これは一体なんだ」と訊かれても、「ケーキです」という答えが返ってくることもあるだろう。それでは結局説明になっていない。なっていないことを承知で今そう書いたのだが、つまり、意味の説明は、結局別の言葉によるその（不十分な）言い換えにしかならないことがあるということなのだ。そのことをひとつ押さえておきたい。

もうひとつは、これと実は関連するのだが、「このケーキは何ですか」という文自体は、外面的にはどうしても同一でしかないということだ。つまり今仮に「このケーキは何ですか」という文には、「モンブランです」という類の答えを期待する場合の意味と、「これは一体なんだ」という類の意味の二種類の意味があるとする、それがどちらであるかを弁別する手がかりは、この文自体にはまったく含まれていないということだ。そのことだけなら、むろんスベルベルとウィルソンの議論の中でも十分に強調されているのだが、私はこれを同姓同名の二人の人物のことを考えているようなものだという喩えで考えてみたい。

仮に、例えば知り合いにカール・マルクスなる名前の人物がいるとして、「カール・マルクス」と言っただけでは、『資本論』の著者であるマルクスのことを指しているのか、知り合いであるカールのことを指しているのかは、いわば外からは区別がつかない。むろん文脈によってそのことはほぼ適切に判断されるだろうが、今ここで問いたいのは、その名を口にしたとき、その人の「心」には何があるのか、ということである。もしかしたらその人は頭の中で、『資本論』のマルクスではなく、知り合いのカールの顔を思い浮かべ、そのような心的イメージを描いているかもしれない（あるいはまったく何も思い浮かべていないことも十分にありうる）。しかし、「あのマルクス」ではなく、「このカール」を志向しているという事態を、単なる言い換えや説明ではなく、どのよう

に言語化することができるだろうか。試しに頭の中で『資本論』の著者であるマルクスの肖像画を思い浮かべ、「あのマルクス」とつぶやいてみればよい。私の考えているのは「あのマルクス」だ、ほかの人ではない、というときの、「あの」の部分に込められている一種の「志向性」を言葉で説明できるだろうか。実は、「あのマルクス」や「このカール」と言ったときの「あの」や「この」に込められているある種の「思い」は、言葉で説明することはできないのである。それは、もうこれ以上言語化できないという、ある種の言語の空白地帯に根ざしている。

もちろん「説明」ならできる。私が言っているのは『資本論』を著した19世紀のドイツの経済学者カール・マルクスであるとか、いやそうではなくて、近所に住んでいるあの気さくなカール君、「あのカール・マルクスと同姓同名の」(!)カール君であるとか、そういう説明はできる。しかし、そういう説明は結局「言い換え」であり、私がマルクス（のことを思い浮かべながらマルクス）という固有名詞を使うとき、そのような言い換えや説明はおそらくまったく頭に浮かんでいない。

さて、話がだいぶ長くなったが、私にとって重要なのは、関連性理論における「推論」が、言語的なものなのかそうでないのか、という点である。

実はスペルベルとウィルソンは、彼らの言う「推論」が非論証的なものであるということを何度も強調している²⁷⁾。非論証的とは、もっと平たく言えば、ほとんど直観的なものだというほどの意味にとってよいと思うが、非論証的な推論とはどのようなものなのか、必ずしも明瞭ではないように思われる。

例えば、最初に挙げた例をここでもう一度考えてみよう。第2章のAとBの会話である。

A：コーヒーお飲みになりますか。

B：コーヒーを飲むと眠れなくなるんです。

このBの発話がコーヒーの申し出を断ったものと解釈する際の「推論」を、われわれはとりあえず次のように整理していた。

〈コーヒーを飲むと眠れなくなる〉→〈もうす

ぐ寝る時間であり、眠れなくなるのは困る〉

→〈コーヒーは飲みたくない〉

もしこの「解釈」が、こうした推論の末に下されたものとするなら、ここで言う「推論」は言語的なものである。しかし実際には、こうした言語的に構築された「説明」をわれわれはいちいち言語コミュニケーションの際にひねり出しているとは到底思えない。この点では、言語の理解は、もっとずっと直観的なものであろう。

もうひとつの例を考えてみよう。これも関連性理論ではよく知られた例である。

C：あなたはベンツに乗りますか。

D：私は高級車には乗らないの。

常識としてベンツが高級車であることを知っている人間なら、このDの答えが「ベンツに乗らない」という意味であることを見抜くことは難しくない。この場合も「ベンツ＝高級車」という等式から、「推論」を言語的に構築することは十分に可能だが、しかし問題は、やはりここでもそのような言語的な演繹の作業が必要だろうかということだ。

さらに、この例の場合、もしベンツが高級車であることを知らなかった人間でも、このDの発話から逆に「あ、そうか、ベンツは高級車なんだな」と察知するということが起こるだろう。だがいずれの場合にせよ、その把握はおそらく直観的なものである。しかし、もうひとつ裏を返せば、このいずれの場合にも、そして先ほどのコーヒーの例においても、もしそうした「直観的な推論」(?)を言語的に再現してみるならば、それは十分に論証的なものだとも言えるだろう。実際、コーヒーの事例にせよ、「ベンツ＝高級車」という等式による事例にせよ、それらはある意味で演繹的な推理であり、言語化するものである。「非論証的な推論」がもうひとつよくわからないというのは、まさにそのためなのだ。それは直観のようにも見えれば、言語で論証できるもののようにも見える。

11 論理の形式そのものとしての言語

ここで、第4章で触れておいた、コード過程と推論過程とがまったく別個のものだということを論じたスペルベルとウィルソンの説明に戻ろう。そのこと自体に私は異論があるわけではないが、しかしその説明には、推論と言語の関係を見る上で非常に興味深いものがあると思う。それはどうということか。もう一度その部分を引こう。

(7) (a) Either Mary is early or Bob is late.

(b) Bob is never late.

(8) [mæəriːɪzərˌliː]

(9) Mary is early.

(7)の前提から(9)を導き出すのは、「推論」であり、(8)の信号が(9)に結びつくのはコードの規則によるものである、というのが彼らの説明だった。

上の例文をもう少し図式的に書き換えると、

前提1 「 $A=B$ or $C=D$ 」 / 前提2 「 $C \neq D$ 」
→ 結論 「 $A=B$ 」

となるだろう。前提1と2がそれぞれ(7)の(a)(b)の文であり、結論が(9)である。これはアリストテレスに始まる伝統的形式論理学において通常「選言的三段論法」と呼ばれる推論式に対応している。だからこそ、「(7)から(9)が推論できる」とスペルベルとウィルソンも言うのである。しかし、「(7)の前提から(9)が推論できる (9) can be inferred from the premises in (7)」と言うとき、では、この「推論」の内容、つまり上の図式で言えば、「→」の部分で行われているであろう思考を言葉で説明することができるだろうか。

驚くべきことに、というか当然のことに、われわれはこの部分を言語化できない。やってみようとする、こうなるだろう。「だって、 $A=B$ か、そうでなければ $C=D$ なんだから。それで $C=D$ じゃないって言うんだから、 $A=B$ ってことじゃないか」

これは、上の前提1、2と結論を、そっくりそのままぞったものでしかない。そうではなくて、今私が求めているのは、「前提1・前提2」と「結論」とのあいだに入ってくる思考を言語化するこ

とである。そして、それは不可能なのだ。

実はこのようなものが「推論」だというとき、それは前提から結論までの一連の流れすべてをまとめてそう呼んでいるのであって、前提から結論を引き出す「→」の部分だけをいうのではない。この矢印の部分を言語化せよとは、思考不可能なものを思考せよと言っているに等しいのだ。別の言い方をすれば、それは「思考」ではない。ここにあるのはいわば生の論理形式とでも言うべきもののなのである。 $A=B$ もしくは $C=D$ であり、なおかつ $C=D$ ではないとき、残るは $A=B$ しかない。そこに「思考」の入り込む余地はない。もうこれ以上言語では説明できないという論理形式そのものが、ここにある。もしこれが「推論」だとすれば、その内実は、決して言語の表面には浮かび上がってこない「何か」に支えられているということになる。

私にはここで、ウィトゲンシュタインの「論理は先験的である (Die Logik ist transzendental.)²⁸⁾」という言葉が実感を持って感じられる。ウィトゲンシュタインの「先験的 (ないしは超越論的)」という言葉が何を指すのかは、ここでは到底一口には論じられないから措くとして、あくまで私なりにこれを敷衍して言うなら、論理は言語とともに一体としてあり、われわれは言語によっては論理を説明できないという事態がここで名指されていると理解しておきたい。実際、論理がなぜ論理的なのか、と問われても、だってそれが論理というものだ、と言うしかないような先験性がここに顔を見せている。 $A=B$ もしくは $C=D$ であり、なおかつ $C=D$ ではないとき、残るは $A=B$ しかない。これを当然とわれわれに感じさせるものが何なのか、それをつかまえるのは、もはや言語の仕事ではない。それは言語のはるか彼方、あるいはむしろ言語の「ずっとこっち」にある。つまり言語そのものにぴったりと張り付き、言語の中に内在している。むしろ、このような言語の形式をわれわれは論理的とみなす、ということなのではあるまいか。ここで、論理形式を言語形式から引き剥がすことはできない。論理は、こ

こで言語の形式と一体としてある。

12 表現、意味、意図の一体性

さて、われながらかなり錯綜した説明しかできていないのだが、最終的に私の言いたいことは単純である。それは、「推論」とは言語形式そのものに潜む論理性の別名であり、それを追い詰めると言語化できないある深淵にたどり着くしかないということだ。

「発話の意図」なるものがあるとして（それは当然あるのだが）、それが言葉で「復元」された場合には、実はその表現された言葉に対してまた同じ問題が起こる。つまりそれはどういう意味か、と何度でも問いを重ねることができるのである。

「このケーキ何?」「何って何?」「このケーキがどうしてここにあるか、その理由だよ」「理由って?」「だから誰が持ってきたかとか、そういう事情のことだよ」「事情って?」これでは話にならない。しかし（この例はかなり誇張されているが）、もし相手がものすごくわかりの悪い人間であれば、こういうことだって十分ありうるし、実際に経験することもあるはずだ。つまり、言葉を理解するとか相手の意図を理解するというときには、必ずどこかで、もうこれ以上言葉では説明できない、ほとんど直観的としか言いようがない、非言語的な理解の局面が潜んでいるのである。逆説的な言い方になるが、言語の理解は非言語的なものなのだ。関連性理論では、そこまで根源的なレベルは問題にしていない、というのはその通りだろうが、しかし、そうだとすれば、やはりそれは、言語理解のもっとも難しい部分をブラックボックスに入れたままにしているということになる。言葉を言葉で説明するということがかわれわれにはできない以上、「意図」なるものをあまりあっさり考えないほうがよい。でなければ、人間の言語行為の持つより深いダイナミズムや創造性を取り逃がすことになるだろう。

言葉を言葉で説明する試みは、必ずどこかで終わる。そこから先は、もう飛び越えるしかない。

そのジャンプのことを「推論」と呼ぶのなら、それは非言語的なものでしかありえない。先ほどの $A = B$, $C = D$ 云々の例が示すように、「推論」とは、その内実を見れば、結局のところ言語そのものに内在するある種の深淵のことなのだ。最初の方に挙げた、スペルベルとウィルソンによるもうひとつの「推論」の例をもう一度見てみよう。

(4) Jones has bought the *Times*. (ジョーンズはタイムズを買った)

この文の意味を理解するとき、「推論」が働いているとスペルベルとウィルソンは言うのだが、むしろその理解は直接的・直観的である。実際、彼ら自身書いていたではないか。「普通の聞き手は普通の状況ではこの2つの意味からひとつを選ぶのに何の問題もなく、たいていは選択をしたということすら気づかないだろう」と。もちろん彼らは、「普通の聞き手」はほとんど無意識のうちに実は「タイムズ紙一部」か「タイムズ社」かの選択を「推論」によって定めているのだ、という意味で言っているのだが、「無意識の推論」とはそもそも何だろう。それこそ言葉によってはつかまえない「何ものか」ではないのか。もしこうした理解が正しければ、スペルベルとウィルソンの言う「推論」とは、ほとんど「直観」の別名にほかならない。それは、言葉にはならない直観か、もしくは言葉そのものと一体となった「論理的形式」そのものでしかない。

ここでは紙数の関係でもうこれ以上精密に展開することはできないが、ほとんど論証抜きでここに結論を述べるならば、私は、「推論」なるものは、聞き手や話し手が頭の中で考えるというようなものではなくて、ほとんどコンテキストそのものの中に延び広がっている、いやむしろ畳み込まれているようなものだと考えるべきだと思う。われわれが言葉を身につけるとは、そのコンテキスト自体も含めて身につけることにほかならない。だから、言葉の形式と別に「推論」が存在しているわけではない。われわれが生きているこの世界、今言葉を発しているその文脈、そのコンテキストの全体はどのようにしても言語化不可能だが、

「推論」はその中にすでに畳み込まれているのである。

だから、人が「主体」となって何らかの「推論」を頭の中で行っている、と考えるべきではない。言語による表現とその意味とその意図と推論と解釈は、どれも完全に渾然一体となって存在している。そのどれひとつをとってみても、分離することなどではしない。「字義の意味」が、その言葉そのものと深くかかわりながら、なお文脈から切り離しては存在しないように、「推論」もまたわれわれのコミュニケーションとしての言語体系そのものに密着し内在しながら、コンテキストの全体としてわれわれのコミュニケーションの中に生起するのだ。だから「意図」とか「文脈」とかいうものを言語表現そのものよりも「深い」レベルに探してはならない。それはすでに言葉の表面に含まれている。少なくとも、表現と意味と意図とコンテキストの一体性の中に「推論」もまた位置づけられねばならない。

言葉がなぜ意味を持つのか、われわれがある言葉をなぜ理解できるのか、それはもはや神秘の次元に属するとでも言うほかないが、しかし言うまでもなく重要なのは、言語をそのような神秘の領域に祭り上げてしまうことではなく、ごく当たり前の日常のコミュニケーションの中で、われわれは世界をいわば全体として生きているということである。主体と客体、記号と指示対象、コードと推論、そうした二項対立的な思考からは逃れ去るものとして、言語の体験はもっとはるかに豊かに、存在するのである。

〔参考文献〕

- D. Davidson 1986, 《A Nice Derangement of Epitaphs》 (in *Truth and Interpretation: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson*, E. LePore (ed.), Blackwell)
- P. Grice 1989, *Studies in the way of words*. Harvard University Press. (清塚邦彦訳1998『論理と会話』勁草書房)
- J.R. Searle 1979, *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*, Cambridge University Press (山田友幸監訳2006『表現と意味 言語行為論研究』誠信書房)
- C. Shannon and W. Weaver 1949, *The mathematical theory of communication*, University of Illinois Press. (長谷川淳, 井上光洋訳1969『コミュニケーションの数学的理論：情報理論の基礎』明治図書出版)
- D. Sperber & D. Wilson 1995, *Relevance: Communication and Cognition*. Second Edition. Blackwell. (内田聖二ほか訳1999『関連性理論—伝達と認知—』研究社)
- L. Wittgenstein 1922 (←1918) *Tractatus logico-philosophicus*, Routedledge and Kagen Paul. (奥雅博訳1975『論理哲学論考』(ウイットゲンシュタイン全集1) 大修館書店)
- 今井邦彦 2001 『語用論への招待』大修館書店
大澤真幸 1994 『意味と他者性』勁草書房
野本和幸・山田友幸 (編) 2002 『言語哲学を学ぶ人のために』世界思想社
野矢茂樹 1999 『哲学・航海日誌』春秋社
東森勲・吉村あき子 2003 『関連性理論の新展開 認知とコミュニケーション』研究社
北條文緒 2004 『翻訳と異文化』みすず書房
森本浩一 2002 「隠喩と虚構」野本和幸/山田友幸 (編), 246-261.

注)

- 1) D. Sperber & D. Wilson [1995]
- 2) この例は、森本浩一 [2002] から (多少改変しながら) 借りたものである。
- 3) 「関連性理論」では、「文」(sentence) と「発話」(utterance) を区別することを重視する (D. Sperber & D. Wilson [1995], p. 10) が、ここではとりあえず、書かれているものが文、それが誰かによって口にされれば「発話」という程度の区別に従っておく。
- 4) これも関連性理論では、通常三つのレベルに

- 区別するのが普通である。すなわち「字義通りの意味」「明意explicature」「暗意implicature」である。しかし、明意と暗意の区別は、関連性理論の支持者でさえ認めるほど（今井邦彦 [2001]、第5章）、微妙であり（それが特にいわゆる「高次の明意」であるほど）、また一方で、「字義通りの意味」と「明意」とがどれほど区別されるものか、というその逆の議論もある。そのため、ここではごく常識的に「字義通りの意味」と「それが暗に意味するもの」ぐらいの二つのレベルで考えておく。
- 5) なお、厳密に言えば、このコーヒーの例文は、スペルベルとウィルソンがそのアイデアを継承したポール・グライスの議論（P. Grice [1989]）を説明するために使われている例だが、関連性理論の基本的な考え方はこの例文を元に説明した場合でも変わらないので、そのまま利用した。実際、関連性理論の基本的発想を説明するためにこの例を持ち出す人は多い。例えば東森焔・吉村あき子 [2003] pp. 9-10など。
 - 6) D. Sperber & D. Wilson [1995], p. 13 sqq. (邦訳p. 15以下)
 - 7) D. Sperber & D. Wilson [1995], p. 13.(邦訳, 同)
 - 8) D. Sperber & D. Wilson [1995], p. 13.(邦訳, pp. 14-15)
 - 9) C. Shannon and W. Weaver [1949]
 - 10) D. Sperber & D. Wilson [1995], p. 4 and p. 15 sqq.(邦訳, p4およびp. 18以下)
 - 11) 大澤真幸 [1994], p. 277以下
 - 12) D. Sperber & D. Wilson [1995], p. 27.(邦訳, p. 32)
 - 13) J.R. Searle [1979]. サールは主に隠喩との関係でこの問題を論じているが、サールの隠喩論はまた別の機会に検討したいと考えている。
 - 14) 野矢茂樹 [1999], p. 342.
 - 15) D. Sperber & D. Wilson [1995], p. 176.(邦訳, p. 213)
 - 16) D. Sperber & D. Wilson [1995], p. 182.(邦訳, p. 222)
 - 17) D. Sperber & D. Wilson [1995], p. 176.(邦訳, p. 213)
 - 18) このような観点を、私はドナルド・デイヴィドソンの哲学、特にD. Davidson [1986] に負っている。（この点については、拙論「翻訳と意味」（『駿河台論叢』第34号、2007年7月発行）で詳しく取り上げたので併せてお読みいただければありがたい）
 - 19) 言語の「意味確定度不十分性」（今井 [2001], p. 33）については、関連性理論も十分に強調するところであり、たとえば、I saw that gasoline can explode.という例文が、(a) I saw that it is possible for gasoline to explode.(ガソリンが爆発することがあるということがわかった)、(b) I saw that can of gasoline explode.(あのガソリンの入った缶が爆発するのを見た)、の両義的可能性を持つことを論じている（D. Sperber & D. Wilson [1995], p. 184,邦訳, p. 223）。しかし、スペルベルとウィルソンの議論では、結局そういう曖昧性が、関連性の原則によって除去され、言葉の意味は一つに定まるという思考の枠組みが維持されている。そのため、こうした例は結局、例えばThe bat is grey.が「そのこうもりは灰色だ」か「その（野球の）バットは灰色だ」になるような例とか、果てはShe is a student.(この例は今井 [2001] によるもの) のSheがどの女性を指すかは文脈がなければ定まらない、程度の話と同列に置かれることになってしまっているのである。ここでは、われわれが示したような「自転車ではダンプカーには勝ち目がない」という一見何の曖昧性もないかに見える文でさえ、その「字義通りの意味」なるものを（中立的に）語ることは不可能なのだ、という視点は存在していない。
 - 20) この言語の「慣習」については、D. Sperber

- & D. Wilson [1995] は、あまり注意を払っていないようである。関連性理論の立場からすれば、そういう態度をとる理由はよく理解できるが(つまり慣習もまた「最適の関連性」の一部として説明してしまえるから)、私は、「このような場面では普通このように言う」という言語的慣習の問題は結構大きいものではないかと考えている。
- 21) つまり、言語を確固とした中立的な体系だと考えている人は、先ほどのシャノンとウィーバーのコードモデルと同様の過ちに踏み込んでいることになる。われわれは言語に対しても世界に対しても、メタ・レベルに立つことが決してできないのだから、誰のものでもない非人称的(無人称的)な体系としての言語体系を想定することは本来不可能なのだ。どこかに中立的に存在する言語体系というもの
- を考える人は、その言語に対して全知全能の知識と能力を持つ(つまり平たく言えばどんな語や言い回しも知っている)神のごとき話し手を仮定していることになる。しかし、言語活動がある程度創造的な活動でもある以上、そんなことは原理的にありえないのである。
- 22) 北条文緒 [2004], p. 149. なお、『キッチン』の英訳はこれに限らず間違いが多すぎる旨が、この本では指摘されている。
- 23) 野矢茂樹 [1999], p. 340.
- 24) 同.
- 25) 同, p. 345.
- 26) この「二層構造」についても、前掲拙論「翻訳と意味」で論じたので、ここでは詳しくは踏み込まない。
- 27) D. Sperber & D. Wilson [1995], 第2章参照.
- 28) L. Wittgenstein [1922], 6. 13

Literal Meaning and Inference — On the Relevance Theory

Toshihiro Kokubu

[Abstract] The “relevance theory” proposed by Sperber and Wilson is a convincing way to explain the mechanism of our language communication. However, a question can be raised concerning the two main points upon which their theory is based: literal meaning and inference. The purpose of this study is to analyze the validity of the separation of literal meaning and inference. Firstly, the literal meaning, considered as fixed meaning in the null context, does not exist. Secondly, making inferences, in the many cases, is almost a process like an “intuition” that we cannot express in words. Moreover, in such cases, the inference process is inseparable from the very form of language. Although the relevance theory claims that decoding and inference are two independent functions in verbal comprehension, this study concludes that the two processes cannot be independent of each other.

[Key Words] Relevance theory, Meaning, Inference, Philosophy of language, Communication